

## ▲▲▲ ヒマラヤ・アマダブラム 夢幻 (10年前の初夢) ▲▲▲

大塚 忠彦

(この駄文は、10年前に書いた机上登山の夢幻紀行を今回の特集のために抄録したものです)

宙に張り出した巨大な懸垂氷河舌端に危うく載っているC3(第3キャンプ)は生きた気持ち全くしない地獄のような所であった。標高は既に6400m、呼吸が苦しい。横になると肺水腫が出るから、ザックに凭れて狭いテントの中で半座位でウトウトするしかない。ア～ア、登頂などはもうどうでもよいから、早くこの地獄から脱したい。

時折ドーンという大音響が空気を震わせて震え上がる。雪崩の音である。このC3は、アマダブラム山頂から一気に500mほど落ちている懸垂氷河が狭いテラスを乗り越して宙に競り出して氷河舌端を作っているというきわどい位置に設営されているもので、テントも3張りが限度という猫の額である。いつ上からセラックが崩壊して襲われるやも知れず、また、テントが載かっている舌端がいつ崩れてもおかしくない。そうなればテントごと一気に2,000mほど宙を飛んで下のミンゴ氷河に叩きつけられるから、遺体も木端微塵になるに違いない。捜索隊も入れない危険な場所だから、バラバラになったまま氷河に埋まって氷漬けとなり、やがて数十年してから氷河の末端に流れ出るということになる。

あ～あ、恐ろしや、恐ろしや。実にそのとおりで、その前年の秋にここC3にキャンプしていたスウェーデン隊が落下してきたセラックに天幕を直撃され、天幕ごと吹き飛ばされてクライマーとガイド10人全員が遭難・死亡した。

アツッ！ゴーツときた！体が宙に飛ばされた！天地左右何も分からず真っ暗闇の中をぐるぐる回転しながら奈落の底に吸い込まれて行く……。一体何がどうなったのだ？段々気が遠くなってきた。神さま、仏さま、キリシトさま、オカアチャン！誰でもいいから助けてくれエ～！気絶するッ～！！

……。というところで目が覚めた。寝汗をぐっしょり掻いていた。その前年の初夢(白馬岳・主稜)では何とか天辺まで這い上がったが、この年は氷河に氷漬けの夢であった。イカン、イカン、こんな夢を見るようでは精神が嬰退してしまっているのではあるまいか。心すべきことである。

アマダブラム！ ヒマラヤ・エベレスト街道の要衝「エベレスト・ビュー・ホテル」のカフェテラスから目の前に一番大きく見える海坊主のような奇怪な姿をした秀峰であるから、記憶されている方も多



(C3を設営した山頂直下の懸垂氷河舌端)



(C3 下写真は mountain madness HP より引用)

いと思う。土地の言葉で「母（アマ）の首飾り（ダブラム）」。母とは神々の座、母なるエベレストの敬称。

アマダブラムは、8000mを越えるヒマラヤジャイアンツが轟めいているクーンブ・ヒマール山群の中では標高こそ7千メートルに満たない

“低山”ではあるが、隣のカンテガ峰やタマセルク峰と同様にヒマラヤ巒に覆われて天に屹立する秀峰である。神々しく輝く山容は神々の座でもあろうか。四方から羽を上げたように突き上げている4つの稜線がそれぞれ4つのジャンダルムを形成し、その稜線が登り詰めた頂点が主峰アマダブラム峰 6858mである。

ヒマラヤのmatterhornとも称されている。四本脚のタコが足を持ち上げて頭を突き出している姿を想像して頂ければよい。

13年前、初めてヒマラヤに行った時にナムチェの峠から見たこの山の奇怪な姿に魅せられ、また、その2年後にイムジャ・ツェ峰に行った時には、この山の直ぐ麓から見上げたその壮大な山容に圧倒

されて、その内いつか必ず登ってやろうと秘かに目論むようになった。イムジャ・ツェからの下山の帰途には、登れそうなルートは何処かと目で追ったり、現地ガイドにいちいち聞いたりして研究に余念がなかった。カメラを望遠にして登路となる稜線や壁やテラスやリッジの写真も沢山撮った。

帰国してからは、カトマンズの登山専門書店で買い込んだガイドブックや地図、現地ガイドに教えて貰った情報、海外登山サイトの登攀情報、撮影して来た写真の精緻な解析に加えて JAXA 地球観測衛星などからの衛星写真やグーグル・アースの画像なども総動員して登路の研究に余念がなかった。

アマダブラムの登路は、東稜、北西稜、南西稜、北稜の何れかを辿るしかないが、そのうちの最も易しそうなルートが南西稜であって、ここがアマダブラム登攀のノーマル・ルートになっているらしい。幸いなことにこの稜線はイムジャ・ツェへの往復で通るイムジャ溪谷沿いの道からよく見えたので、登攀ルートの机上組立にも役立った。ただ、“最も易しい”ルートとはいえ、その登山日程はカトマンズから往復1ヶ月、アマダブラムBCからの往復だけでも10日から2週間を要する行程であり、また、登路となる南西稜は総て氷雪と岩のミックス帯の絶壁であるから全行程アンザイレンとなる。特にC2から上部はポーターなどは登れないから、ガイドと二人だけの登攀となり、ルート工作もザイル確保も荷上げも総て主客の区別なく二人で平等に行わざるを得ないので、厳しい登攀となることは疑いない。



（イムジャ溪谷沿いに右からアマダブラム、ローツェ、エベレスト）



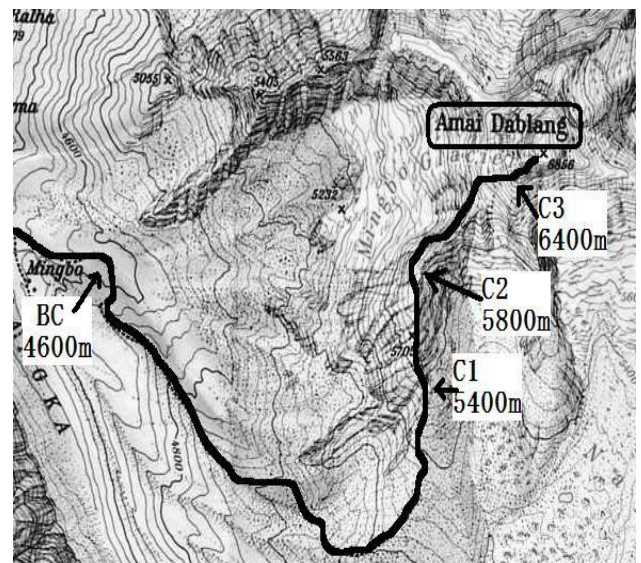
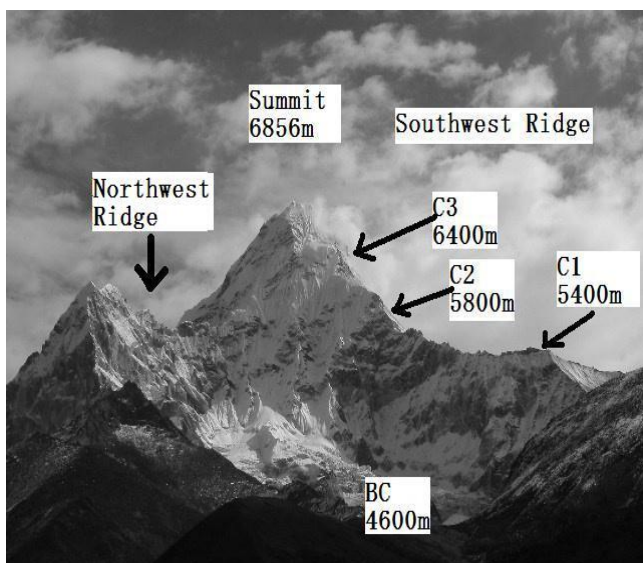
（奇怪な海坊主のアマダブラム峰 右奥はヒマラヤ巒のカンテガ峰）

また、この山は難しい山でもあるので、当時は登攀パーティー数も年間3パーティーも入れば多い方だとのことで、この山に関する情報も少なくまた登った経験がある現地ガイドも少なかった。今から考えれば全くの無謀としか言いようがないが、逆にそのような困難さが私の登攀意欲を燃え上がらせたのであった。



(絶巔のC2-5800m 後方はカンテガとタマセルク峰 National Geographic HP から引用)

そのようにして、ルート研究もほぼ満足いくものが出来上がり、BCを出発してから山頂に至るまでの全ルートの詳細を一足一投まで暗記できるまでになった。恥ずかしながら、体力面はさておき技術面やロープワークではガイドをリードできる域に達したと思いたい。下に掲げた画像はこのようにして作成したルート図の一部である。



さて 2008 年、登頂計画も出来上がり現地ガイド会社に予約を掛ける段になって、ちょっと待てよ、確か一昨年も昨年もこの山ではC3のテントが懸垂氷河舌端の崩壊で吹き飛ばされて、ヨーロッパからの登山隊全員が遭難死した事故があったナア～、それに、ルートが困難なことに加えて標高も 7000m に近いので、体カトレーニングも何もしていない小生には体力的にもヤバイかと思ひ悩んだ末、岳友のアカさんに相談してみた。

彼は本当は、小生の実力ではアマダブラムは登頂の可能性皆無、悪くすれば遭難死と確信していたのであろうが、心優しきご仁はそうは言わず「ま、アマダブラムは一杯手垢がついた山だよ。ポピュラーな山より余り知られていない山の方が値打ちがあるヨ。それに登山費用も桁が一桁違うしネ」と懐具合まで心配してくれた。持つべきは朋である。ヒマラヤの一般的な山の登山費用はせいぜい二桁の前半であるのに対して、この山はその 10 倍の 2～3 百万も掛かり、超極細年金で口を糊している小生にとっては清水の舞台から飛び降りるに飛び降りられない程の費用でもあった。

彼の意見を多として、早速ターゲットの変更をして、先年解禁されたばかりの同じクumbu・ヒマールのキャズ・リ峰(6186m)に転進した。この山は未だアメリカ人の 3 パーティーしか登ってなくて、登れば日本人初登頂という荣誉?も狙ったのであるが、C2 上部の氷の状態が悪くてアイスクリュウが利かず敗退した。単独のガイド登山であった。




(マツチエルモから望むキャズ・リ峰 6186m)

そのようにして、アマダブラムは今では夢・幻の山となってしまったが、今でも目を閉じればその奇怪な山容や想像した登路のあれこれが鮮明に脳裏に浮かび上がってくる。彼岸に行ってからでも驚にでも生まれ変わってこのアマダブラムの上空を飛んでみたいものである。

(冒頭の夢の続きは、興味ある方は[小生まで](#)お申し越し下さい。駄文ですが登頂～下山迄の机上登山全文をお送りします。但し、全編これ机上登山で弾きだした産物ですので、この山行記を参考にして登山し、その結果遭難されても当方は責任を負いかねますので、予めご承知おき下さい)

(2017 年 3 月記 完)

特集記事目次画面に戻るには、画面最上段最左側の「戻るボタン」で戻って下さい